

「漢方薬を煎じてみよう」という講座を時々、開いている。テーマに合わせて、薬方(漢方薬)を選び、実際に煎じて味見する。ある時は葛根湯を選んだ。葛根湯を構成している薬味(生薬)は葛根、麻黄、桂枝、芍薬、甘草、大棗、生姜の7味である。生姜は食事で使うヒネショウガを使うので、あらかじめ量って刻んでおいた。それ以外は、1日分の構成量をそれぞれいかり(0.1グラムまで量れる)で参加者に量ってもらう。鍋に入れ、約600ccの水を入れて煎じる。

1時間かかるので、その間に、お話をする。どういう時にどの薬方を飲んだら良いか、その薬方はどういう薬味の構成になっているから、どういう病態に効くという様な話をする。

そんな講座なのだが、ただ話だけでなく、異常な熱感とはどういうものか、異常な脈とはどういうものかを実際に診てもらう為に、参加者の中で好例はないかと探したところ、見つかったのがこの患者である。

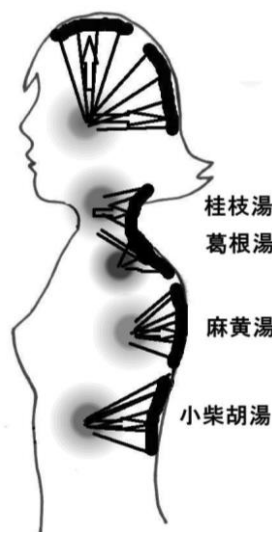
背中の上中中央付近で邪熱を感じ、脈は緊張していた。聞くと、産後(3年)調子悪く、月に1回に頭痛・吐き気・寒気が起こると言う。またカゼをひきやすく、5ヶ月前には目まい・飛蚊症があった。

病院では埒が明かず、漢方薬はどうかと思っ、この講座に参加したとのことだった。講座では背中における異常な熱を皆が手を当ててを診てもらい、また脈の緊張を診せてもらった。

漢方薬ならば、小柴胡湯類が効く病態だが、鍼を勧めたら、後日、予約の電話があった。

予想より早く、計5回、治療開始より1ヶ月余りで治癒した。

風邪(ふうじゃ)(カゼの邪気)は左図の様に、①→②→③→④→⑤と侵攻して来る。自己治癒力が邪気と戦う為に熱が生じる。それが邪熱である。邪熱の発生箇所を示したのが右図である。邪熱は腹面より背面に多く出て来る(右図)ので、それによって基本的なカゼの薬方を選ぶことができる。



患者の場合、④付近に邪熱があった。原因がいわゆるカゼであったかは関係ない。とにかくここに邪熱があるということが重要で、この状態は小柴胡湯類が効く。

産後何らかの原因でここに邪熱が停滞するようになったわけだが、邪熱がそれ程強くない為に、

普段は明確な症状とはならなかった。ところが、体調の変化により、邪熱が強まったり、動いたりして、頭痛・吐き気・寒気などの症状が出たのだろう。月1回というのは生理周期に関係していたかもしれない。

カゼを引いて、病院の解熱剤などで落ち着き、発熱が収まっても、いつまでも咳が残っている人がいる。症状(一方は頭痛・吐き気、他方は咳)は違うが、漢方的には、病態はほぼ同じである場合が多い。膈間膜付近の邪熱が一方で咳を起し、他方では食道や胃に影響して吐き気となる。邪熱が上って頭痛を起す。元々の体質により、症状は変わる。(2013年6月芒種)